

## 『訓注祖堂集』 出版によせて

ここに本研究所・研究報告第8冊として訓注『祖堂集』を公刊できる事を大きな喜びとするものである。今回の訓注は、三十年以上前から、禅文化研究所で読み続けられたその成果を古賀英彦氏が整理したものである。

読書会は、担当者が発表しそれを基にして徹底的に検討を加えるというそれ自体は変哲もないスタイルであったが驚嘆すべきはその実質であった。全盛期の柳田聖山先生を班長に、シナの俗語研究から発展して禅語研究に新機軸を開かれた入矢義高先生を講師としてお迎えし、他にも錚々たる学者・老師が列席しておられた。

そこでは発表者の草稿が秋霜烈日に曝され、完膚なき批判によって原形を留めぬことも珍しくはなく、参加者は襟を正して集ったものである。

私が参加を許された頃には、そこで正された意見を集約してさらに草稿を補訂し、次回の冒頭にもう一度検討を加えるという念の入ったものであった。そして、その時の重要な指摘を古賀英彦氏が丹念に記録し、整理したのである。いわば読書会全体の成果は常に古賀氏によってまとめられ保存されていたのであるから、氏の手によって公刊されるのが待たれていたのだが、入矢義高先生ご存命中は終にそれは果たされることがなかった。

当時、最高の知識を結集してもその全てを解読し得たわけではなく、多数の者が参画し、長期間に亘った読書会のうちには様々な理由で必ずしも共通理解に達し得なかった結果も残されてしまっているから、そのままでは公刊できぬというのも無理からぬ話であった。

古賀氏はその後、意欲的に様々な成果を生みながら、しかし常に『祖堂集』読解を原点の一つとする立場を持ち続けられ、繰り返し繰り返し返しお読みになっていらした。

先年、雑談するついで、話題が『祖堂集』に及び、思い切つてまとめてみようかという決意を語られ、その後、精力的に書き下ろしを始められた。それがあがり次第、伊藤デザイン研究所の伊藤寧浩氏に渡し、版下の製作作業をもらった。その後も、体制の不備のた

め幾分か紆余曲折があり、刊行が遅れたがようやくここに日の目を見ることができることになった。

学問とはある種残酷なものである。あれほど卓越し、一時代を画した入矢禅学もまた例外ではあり得ない。様々な方面から批判の声があがり、あるものは正鵠を射ているがあるものは噴飯ものである。しかしそれが学の隆盛というものであろう。

その後、この方面の研究も、その歩みは遅いにしても着実な成果が挙げられている。『祖堂集』に関しても、部分的には秀れた読解や思想研究が行われ、成果も公開されている。本来ならばそれらも斟酌すべきであろうが、ここに公刊する訓注『祖堂集』は禅文化研究所で行なわれた研究会と入矢禅学のある種記念碑的意味をもち、統一的な全訳には今でも大きな意味があるといえよう。

なお、細かいことになるが本書には書誌的解説も原文テキストも掲載されておらず、また当然あるべき索引も付されていない。書誌はすでに柳田聖山先生の綿密な論文があること、原文テキストは専ら本のボリュームの問題もあり、一方で原テキストを自由に参照できる環境があるので今回はいづれも省略したとご了解いただきたく、また索引は、本書が本研究所のデジタル・アーカイブに直ちに登録され、PDFファイル形式で全文公開される予定があり、読者はそれを利用して自由に目的とする語彙の検索が可能となるから、さほど必要性が高くないということ、目次が詳しいのでそれによって補い得ると考えてこれも割愛した。

出版に際しては多くの人々のご協力を賜った。いちいちお名前は記さないが、そのことに甚深の謝意を表するものである。とまれ、本書の公刊によって禅の祖録研究が再び盛んになることを願ってやまない。